

手違いで駄女神にされ  
たカズマに祝福を ！

ぜいろ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

このすばのカズマが駄女神の手違いで駄女神にされたらどうなるのか？身体能力が  
高く運が悪く性欲が消えて顔も全身もあの駄女神ですがキチンとタブンそれなりに力  
ズマさんだと思います。：

注意：完全に小説初心者です！間違いがあつたらすいません。

# 目 次

プロローグ

1

不幸になつたカズマさんにやる気を！

13

倒れた爆裂娘に救済を！

19

本物女神に認められたカズマに目的を！

信号トリオが結成を！  
憎きカエルと戦闘を！

35 29 24



# プロローグ

プロローグ

「はあー」

俺は目の前に広がる緑が綺麗な森の小さな水溜まりを見つめてため息ついた。

「あんのクソ女神人の死をおちょくりさらに俺の体 „佐藤和真“ を無くしさらにさらに性欲まで無くしたんだーー」

そう俺は元佐藤和真だつた者であり、決して今水溜まりに映つてている見た目だけは美少女な駄女神ではないのだ。

え、お前が何を言つて いるのかが分から ない？ ならちよと聞いてくれよ教えてあげる  
からさ☆

そんな、現実逃避をしながら今まで起こつたことを振り返ることにした…

~~~~~

「佐藤和真さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。短い人生でしたが、あなたの生は終わってしまったのです」

突然のこと何がなんだか分からぬ。

部屋には小さな事務机と椅子があり俺に人生の終了を告げてきた相手はその椅子に座つていた。

もし女神が存在するならば、きっと目の前の相手のことを言うのだろう。と言えるほど人間離れした美貌をしていた。

⋮ とりあえず俺は先ほどまでの記憶を思い出す。

そうあれは普段学校に行かず家に引き籠もつていた俺が珍しく外に出たんだつた初回限定版のゲームソフトを手に入れる為に⋮

無事ゲームを獲得して上機嫌で家へと帰つている時、悲劇が起こつたんだ⋮ 携帯をいじりながら俺の前を歩いていた女の子が信号が青になつたのを確認し、そのまま左右を口クに見ず歩いて行く。所に女の子に迫る大きな影「危ない！」と考えるよりも早く俺は女の子を突き飛ばしていた。あの影はトラックの物だつたのだろう

⋮ 俺の人生最後花場だつたな、

⋮ 1つだけ聞いても?」

俺の質問に美少女が頷く。

「どうぞ?」

「…あの女の子は。…俺が突き飛ばした女の子は、生きていますか？」

命懸けでトラックから女の子を助けに入つて、結局間に合わなかつたら悔し過ぎるから

「生きていますよ？もつとも、足を骨折する大怪我を負いましたが」

…良かつた

俺の死は決して無駄にはならなかつたのだ

「まあ、あなたが突き飛ばさなければ、あの子は怪我もしなかつたんですけどね」

…は？この子は何を言つて…

「あのトラクターは、本来ならあの子の手前で止まつたのです。当たり前ですよねトラ

クターですもん。そんなスピードだつてでないですし。つまり、あなたはヒーロー気取りで余計な事した訳です。… ブーケスクス！」

嫌だ、ただでさい親に迷惑掛けてきたのに最初から最後まで大迷惑を掛けてるだなんて、嫌だ親不孝もいいとこじやないか聞きたくないここから先は聞きたくない

しかし何を思つたのか目の前の悪魔は、

「あなたはそのままトラックに轢かれたと勝手に勘違いしショック死したのよ。つまり、あなたはトラクターに轢かれそうになつた恐怖で、失禁しながら氣を失なつたと病院に搬送されながら医師や看護師に伝えられ『なんだこいつ、なつさけねー（笑）』と笑われながら目を覚ますことなくそのまま心臓麻痺で死亡」「そして、あなたの家族も死因を聞いて思わず吹き出すのでした！ブーケスクス」

…よーし分かつた絶対に復讐しよう。いくら顔の綺麗な悪魔もとい駄女神でもここまで人の死をおちよくる権利はないはずだ。女神だがなんだか知らんが絶対に復讐しよう。

人は、聞きたくない事を聞きすぎるとショックなんて消えて復讐だけを考える様になららしい。

「さて、ストレス発散はここまでにして。初めまして佐藤和真さん。私の名はアクア。しようもない死に方をした面白いあなたには、2つの選択肢があります」

⋮ ほう

「1つは人間として生まれ変わり、新たな人生を歩むか。そしてもう1つは、天国的な所でお爺ちゃんみたいな暮らしをするか」

成るほど1つ目は自分が無くなり新しい体となるのか却下だな。ちよと惜しい気もあるが実はもう復讐の仕方を決めててな、この駄女神と一緒に16年間共に過ごした体ごと自爆しようと思つてゐるんだ聞く限り天国という名の地獄に道連れするのが今最も最適解だが根拠はないがなんとなく異世界転生出来そうな気がするから異世界に道連れしようと考へてゐるつまり女神を嫌な世界に連れて行くんだ！⋮ 我ながら頭がおかしいと思うがどうでもいい

と、考えていると

「あなた……ゲームは好きでしょ」

ビンゴ

その話を要約すると

「ここでない世界、すなわち異世界に魔王がいる。

そして、魔王軍の侵攻のせいでその世界がピンチらしい。

その世界では魔法がありモンスターがいて。

言うならば、有名ゲームドラ○エや○フ○フのようなファンタジー世界らしい。

そして、そんな世界で死んだ人達は怖くて戻りたくないからどんどん人口が減つてい  
き：

「他の世界で死んだ人達を送り込む訳よ」

何という移民政策。

「で、どうせ送るなら若くして死んだ未練タラタラな人なんかを、肉体と記憶はそのまま  
で送つてあげようつてことになつたの。それも、送つてすぐ死んだら意味が無いから向  
こうに好きなものを持つていける権利をあげているの」

と言いながらカタログを渡された……なんか道連れしようと考えてたけど目の前の前  
チートを見たらあんなんよりこつちチートを貰つて魔王軍を倒し女の子からチヤホヤ  
された方が有意義な気がしてきた……そもそも俺はゲーマーなのだこんな心躍る話を  
棒に振るような男じやない、とりあえず目を通す前に聞くことにした

「えつと聞きたいんですけど向こうの言葉はどうなるんです？俺、異世界語とか喋れないんですけど」

「その辺は問題無いは、異世界に行くときあなたの脳に負荷を掛けて、一瞬で習得できるから！まあ副作用で運が悪いとパーになるけど…だから、後は凄い能力か装備を選ぶだけね」

「今運が悪いとパーになるとか言つたか？」

「言つたろ」

まあ運は昔から良い方だつたから大丈夫だろう。さあ気を取り直してチートを選ぼう！

約1分後

「ねー早くしてー、どうせ引き籠もりニートに期待はしないからーどれ選んでも一緒にサツサツと決めて後ろが詰まってるのよー」

このやろ、俺がせつかく落ち着いてきたのにまたイライラさせるのかよーし分かつたやつぱり道連れしてやると言うか奴隸にしてやる持つていけるものだろ

「じゃアンタの身体」

「ん。それじや魔法陣の中央から出ないよ・う・に?」

駄女神が止まつたザマア見ろ

「あ、あんたなに私の超麗しい身体に変身しようとしているの?」

へ?何を言つてゐるか分からぬ。とりあえず下を見てみたら大きなお山が2つ…

「は、まさか私に変身して欲情のままもてあそぶんじゃないでしょうね（震え）天罰と自己防衛として性欲をけしてやるーー」

「おい！馬鹿やめろ駄女神がヤバいどんどん俺が駄女神になつていくT S化なんて嫌だー！まだ童貞なのにしかもよりもよつて駄女神なんかにー!?」

「あー駄女神なんて3回も言つた謝つて女神に向かつて駄女神と言つたこと謝つて！」

「うつせ駄女神早くどうにかしろそろそろ立つているのも限界が近いてか性欲を消すんじゃねー！」

そろそろ異世界へ旅立ちそうだ風が強くなつて頭が痛い

あつ

「あーまた駄女神と言つたーちよと待ちなさいよ」

俺は全身駄女神のまま異世界へ旅立つた

「チツクショー！？！？」

︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴︴

# 不幸になつたカズマさんにやる気を！

やあみんな！元氣してるかい？俺？俺は身体が女の子になつたけど元氣……だぞ……タブン

「あ～あ、やつてらんないよなあ―――」

そう俺はついさつきまで普通の男の子だつたんだしかし今は身体や見た目は完全に女の子なのである。どうしてこうなつたのかは前回の回想シーンを聞いてくれ！『……てつ言うか本気で性欲が消えたんだな見た目だけは綺麗だからあつても可笑しく無いのに自分の記憶があるだけ変な気持ちだ』

「まあでも、今思えば少し自業自得な部分が多くつた気もするが今更反省しても仕方ないよなあ……」

… よし！気持ちが落ち着いたまずは異世界の感想を言わなきや、うん

「おー! 自然豊かで綺麗な空気! 沢山の木! 木! 木! そして何よりも目に止まるのが  
と一つても大きくてモシヤとしている熊さん! あれがモンスターかあとつても迫力満  
点だなあ! 今にも襲つてきそうだ… ハハ」

ガウ!

熊さんが襲つてきた! カズマはどうする?

「舐めんな!」

カズマは逃げた超逃げた が、

逃げ切れなかつた

熊がのしかかりされるがままに地面へと倒れた

「ハアハア、熊速すぎだろ逃げても逃げても巻けねー」

冷たい土が走つたことで温まつた身体に染み渡る… 気持ち良い

しかし、それにしても転生場所が森の中だなんて聞いてない。他のチート持ちの先輩方だつたらは多分武器や能力の使い方を説明して貰つてるだろから熊ぐらいい何とかなるんだろう。だが、俺は違つた何も説明が無いままこの得体の知れない身体にされたんだ。知つてる事のは天罰として性欲が消えた事ぐらい、確かに引き籠もつていた俺よりは運動神経が良いことは分かるんだが武器も装備もなしで魔法も使えないからやつた事の無い体術でしか勝つ方法が無い、なら逃げるしか無いだろう

… ハア

「不親切なゲームだなー普通最初はチュートリアルでスライムとかが出るべきだろうに、て言うか最初は街からとかだろなんでいきなり森なんだよ? 星1つだよ」

最後かも知れない悪態を付き諦めて目を閉じようとした… その時!!

「エクスプロージョン!」

と女の子の声が聞こえたと思ったたら遠くから大爆発が起こつた  
それに驚いたのか熊は逃げて行つた

よく分からぬけど助かつた。と、思った瞬間!

ガルルル

さつきの大爆発で寝ていた所を邪魔されてそれはもうお怒りで集団で佐藤和真を  
襲つてきた!

第2ラウンド開始

「舐めんな!」

ハアハアクツソ疲れたあのあと大爆発で起きたモンスターは、木どちよと上がった身

体能力で何とか逃げ切る事が出来たハアもう日本に帰りたいこの世界は当たり前だが死んだらゲームの様に何度も蘇る訳にも行かずゲームの様な世界だがちゃんと現実なので死んだら終了なのだ。しかも敵は強く本気で殺しに来ていた…

「でも、さつきの大爆発多分魔法だよなあ俺も魔法使いたいなあ」

そう俺は、日本にいた時RPGの世界に行きたい理由として魔法を夢見ていたのだからなチャンスはそうそう無いだろう。

「もうちよい頑張りますか！」

俺の冒険は始まつたばかりだ！

俺は大きな一步を踏み出す

その先には！

ギャン

カズマは白く怖い狼の尻尾を踏んだ

### 第3ラウンド開始

元カズマ「やつぱり日本に帰りたい——  
その悲痛な叫び声は森中に広がった  
!?!?!

(泣)

倒れた爆裂娘に救済を！

「誰かいませんか？近くにモンスターが湧くなんて予想外です」

我が名はめぐみんアークウイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者。そんな私は最近色々溜まっていたので気晴らしに街の近くの森で一発ぶつ放したのですが…

「街の近くで撃てば誰か気づいて迎えて来るだろうと考えた事が甘えでしたね」

「……しようがないですね。爆裂道は、茨の道なのです。爆裂によって命を絶つなんて事ぐらいい望むところでしよう！」

私は私の生き様を振り返りながらモンスターに身を任せようとした。次の瞬間！

「うおーー!! 異世界生活一発目の相手はお前だーーー!!」

荒々しい高い声と共に青色の髪をしたお姉さんがモンスターに突っ込んで行つた――

元カズマ said

「ハアハア、やる気を出した途端これがよ！まさか踏み出した先に狼の尻尾を踏むとは思わなかつたな、油断した！」

あのあとは、例のごとく木と身体を信じ身体能力で逃げ切る事が出来た。ハアこれが  
2度あることは3度あると言う事が初めて味わつたな、転生の際に運でも悪くなつたの  
だろうか？

「とりあえず早く森を抜けたいんだが… ここ何処だ？」

ちょっと開けていた最初の場所からだいぶ離れてしまつた。これは何とか下山する為  
に歩いた方が良いのだろうか？ しかしながら

「うーん、ずっと走り放しだつたからあの木の影で隠れながら休憩したいな」

そう、確かにこんな危険な場所一刻も速く抜け出したいがさつきまで全力で走り回つ  
ていたので体力消耗が激しい。それに、今ならまだ明るいからモンスターがいても何と  
かなるだろう！ そうと決まればサツサツと移動しよう今すぐに

ふう、やつと一息ついたな…

さてと、これから的新たな人生について考えておくか。改めて自分の身体を見てみ  
る、うん、やっぱり女の体だな痛みも生々しいから良く出来た夢では無いようだ。夢  
だつたら良かつたのに…まあ、元の体よりは動きやすいからチート能力と思えばいい  
か…

それに、さつきまで自爆やら日本に帰りたいやら言っていたがこうして本能的に生き

ようとしているから死にたくはない様だしな。

現実を受け入れるかあー

「やつてやろうじやねえか！この新しい体で異世界生活をなあーさつきまでのは、長いチュウトリアルだ〜〜！」

本当のリアルゲーム異世界生活をたっぷり味わおう！  
「…せんか…近くに…そうがいです…」

おお！人の声だ、なんて言つているのか分からぬが、もしかしたら山の道を知つて  
いるかも知れない！少し休んだから動けるし行つてみよう！まだ明るいからラツキー  
だ！

移動中

ヤバい！早速ピンチだ!?いかにも魔法使いです。と、言うようなトンガリ帽子を被つ  
ている小さな女の子が倒れていて、そのすぐ近くにいるモンスターが今にも少女を襲お  
うとしている！

どうしよう、この世界でいきなりモンスターに殺され掛けたからか思つていたよりも  
トラウマになつてて体が震えてる…でも！

「…しようがないな」

いくら俺でも、殺され掛けている少女に背を向けるほど堕ちてない。確かに怖いし殺

されるかも知れない、でも！さつきまでの高くなつた気分と駄女神だが腐つても女神  
だつた身体だつたら武器が無くとも勝てる気がする！

つ・：迷つて いる暇はない！一か八かだ！

「うおーー!! 異世界生活一発目の相手はお前だーーー!!」

俺は少女の近くにいるモンスターに突つ込みモンスターの頭を一発殴り掛けた!!  
：あれからどれだけ経つただろうか？あの後力任せで殴つたのだがモンスターは

少し痛 そうに頭を搔いてから俺にターゲットを変えたんだその後は、泥試合化してお互  
い殴り殴られモンスターは諦めたのか飽きたのかのそのそと帰つて行つた・：それは  
もう長い戦いだつた

いやね、確かにモンスターを払う事は成功したよ？でもな、あれは主人公が覚醒して  
真の力を放つ場面になつて良いんじやないの？全身傷だらけだし日も落ちてきた・：  
改めて現実を見せられたな・：

まあ良いかとりあえず魔法少女をと・：

居ない

元居た場所に居ないのだ！嫌な汗が出てきた

「ヤバい、最悪だどうしよう・：」

取り敢えず捜さないと、しかし辺り一面がどんどん闇に飲まれていき傷が追い打ちを

かけるように今更傷んで来て思う様に動けない

俺があのモンスターと戦つている間に他のモンスターに連れていかれたか… それとも誘拐? … 駄目だ考えても考えても悪い予感が流れてくる。

また勘違いだったのかも知れない。今まで良かれと思つてやつた行動が全て裏目に出ている。確かに俺はヒーローでも何でもないただの一般人だ。でも、俺は人一人もまともに救えないのか… もう死にたい…

あつ

俺は、木につまずいたそしてそのまま…

「? 君! 大丈夫… ! てつええ… んぱい! ? と、と… あえず近くのきよ… いへ… ネスはこつちの… 女の子を… しく!」

誰か来たのだろうか俺は誰かに担がれて行つた…

# 本物女神に認められたカズマに目的を！

「あつ、やつと起きた！せん… 本物のアクア先輩なのかな？とにかく意識が戻って良かったです！」

はて？ここはどこだろう？そして今の状態は何だろう目の前には頬に小さな刀傷がある美少女が映っていて俺の頭辺りがとても気持ちの良い温かさと柔らかさで包まれていて安心出来る… これは膝枕と言うやつだな。

とても気持ち良いので2度寝してしまいそうだが、今の俺の体を見てアクアと呼んでいる謎の美少女が気になつたので起きることにした。

「痛っ、つううー」

「ああ！ヒールを掛けているとはいえ酷い傷でしたんだからまだ安静にしてなきや駄目ですよ！ほら、戻つてきてください！」

優しい、まだ今の状況やさつきまでの記憶が戻つてきていないけれど体と精神が不安定な感じだから母性溢れる言葉と声を聞くと泣きそうになる。だからお言葉に甘えることにした。

…さてさつきまで何があつたのか？

たしか、俺は最初に転生された場所が… そうだ森だつたな、その後なんやかんやあつて魔法少女が襲われていたから助けて、助けたあとは… 助けた?

「あの子は?あの魔法少女の子は?」

思い出したまだ助けきつてないじやないか!もしかしたら、まだモンスターにさらわ  
れているかも知れない急がないと!!嫌な汗が出てきた。

「魔法使いの…ああ、あの子ですね。大丈夫ですよアクア先輩?あの子なら今ダクネス  
が看病していますよ。安心してください。」

看病している?…つまり!

「…もしかしてアクア先輩も定期的に下界へ降りてあの子と仲間になつたのですか?  
でしたら少しは変装をした方がいい…『生きているんですか!?しかもここにいるんでか  
!』は、はい確かに今ここでダクネスが看病しています。疲れ切っているのかぐつすり  
と寝ていてるだけなので安心してください。」

良かつた。前半何か言つていたが今は、魔法少女が助かつたことだ!勘違いで終つて  
なくて本当に良かった!取り敢えずこの人には色々感謝しなければ!

「あの今日は、森で倒れ込んでいたあの子を助けて貰らいついでに俺も助けてくれてあ  
りがとうございました!」

「いえいえ、困っている人を助けて上げるなんて当たり前のことですよ。： てつ、え俺！」

優しいな。： てつあ、しまった今俺は見た目だけは女の子だつたんだつたうつかりしてた！ なんて誤魔化そう？

「： あの、ちょっと1つ聞いてもよろしいですか？」

まさかチートとして姿を変えたなんて信じて貰え無いと思つた俺は言い訳を考えようとした時、助けて貰つた恩人から質問を受けたから聞く事にした。

「あなたは、もしかして元日本人の方ですか？」

~~~~~

あれから数時間質問されたり俺の自身の事を教えたり、この世界の説明や仕組みを教えて貰つた。

質問の時、度々頭を抱えたり青い顔をしていたが3割位俺のせいだったので日本で最上級の謝り作法の土下座をした。その時慌てた様子で頭を上げて下さいと言われたので許してくれたのだろう。

ちなみにこの方は、この国のエリス教徒の女神エリス様だ！ どうしてそんな方がこの世界に降りて来たのか聞いてみると少し悩んでから、  
「時々この盗賊姿でこの世界に来て色々仕事や息抜きをしているんです！ この事は、内

緒ですよ♪」

と、シーのポーズをしながらウインクをしてみせた。

俺は素直にかわいい人だなと思つた。

「取り敢えず私は仕事が出来たので、一旦天界に帰りたいと思います。アクアさん…いやカズマさん？うーん他の名前の方が都合が良いのですが…」

どうやら俺の呼び方を迷つているらしい。ならアクアとカズマを掛けて

「じゃあ“アズマ”にしましようか？単純ですが」

「アズマ、いい名前ですね！分かりました！ではアズマさんにはこれから改めて魔王討伐の為の勇者候補の一人として旅立つ事になります！」

いつの間にかに、頬の傷が無くなつて白くゆつたりした羽衣を着て短髪だつた髪伸びエリス様は優しい笑みで力強く語つてくれた！

これだよ！俺が求めていた女神様が勇者として導いてくれるイベントは！

「分かりました。勇者として必ず魔王討伐をすると誓つて見せます！」

確かに、この世界は本当に現実だがモンスター討伐や豊かな自然やこれから使えるであろう魔法などわくわくドキドキな冒険者ライフが待つてているのだろう！この新しい体でもう一度頑張つて行こう！

「フフ、いい返事です。ではあなたの旅路に祝福を！」

(その後)

「そうだ、所で？アズマくんこの世界に私がいる時はクリスって呼んでね」

「分かりました！クリス様！」

「ええと、クリスと呼んでね？あと、もし良ければ君のパーティにダクネスを入れてくれないかなあ？」

「分かりました？クリス様！」

「だから、クリスだつてばあ……本当にダクネスをよろしく出来る？」

「分かりました！クリス様！」

「……あと、ちょっと口調を変えて変装もするんだよ？少しの変化でもいいから」

「分かりました！クリス様！」

「本当に大丈夫かなあ——？」

# 信号トリオが結成を！

クリス様が仕事が出来たと言つて行つてしまつた…

「また、会えるかな？」

…あの異世界転生イベントは、ハツキリ言つてとても素晴らしい胸熱展開だつた  
なあ。

俺の魔王討伐の旅が等々始まつた瞬間だつた！

そんな、物語の主人公の気分でこれから魔王討伐までの旅をウキウキしながら思い  
描き外に飛び出そうとした所でクリス様の言つていた事を思い出した。

「危ない危ない。そういえばまだ、変装しろと言われていたのにしていなかつた。」

クリス様は、仕事へ戻る前に変装して口調をえてくれと言つていたな。忘れる所  
だつた。

俺は、クリス様から教えて貰つた方法で姿と口調を変えた。

えつ？どうやつてこんなに早く変われるかつて？俺も分からぬがどうやら女神の  
身体は、魔力をキュッと意識しながらすると一瞬で姿や口調が変わるらしい…  
「あーあ、私…！」

驚いた！確かに今俺と言おうとしたら強制的に私と言つた！

俺も何言つてるか分からぬが、とにかく魔力らしき物をキュとしたらすぐ変わつた。

そして今の変装状況は、さつきまでのミニスカートが少し長くなりノウスリーブだつた服も半袖になり青いフードを被つた事によりプリースト風で青を基調としている。

まあ、余り変わつていらない気がするがフードを被つたからまあ大丈夫だろう。

「後は、ギルドへ行つて、とその前にあの魔法少女に会つておくか。寝ているだけで問題は無いと言つてたし大丈夫だろうけどギルドの場所を聞けると思うし」

あとクリス様は、自分がいない間ダクネスを任せましたよ！と任されたので忘れてはいけない。

取り敢えず俺は、部屋から出て彼女達が居る部屋に向つた。

「そういえば、ダクネスさんを頼んでいた時のクリス様は少し不安そうだつたけれど、どうしてなんでしょう？」

相変わらず口調が変わつて変な気分だ。

移動中

着いたので軽くノックすると、どうぞと言われてたので扉を開けた。

「貴女が、クリスの先輩のアズマ殿かな？初めまして私はダクネスという。職業はクル

セイダーだ。クリスが帰るまでだが仲間として宜しく。」

そういうつてダクネスは手を突き出した。それに応えて俺も、

「クリスさんから色々聞いているみたいだけど、これから臨時とはいえ仲間になるんだから私のことは、呼び捨てで構いませんよ？ダクネスさん宜しくね！」

と言い握手した。まだ口調が変わる事に違和感があるが、しつかりしている人で良かった。でも、だからこそクリス様が不安がる理由が分からないなと考え過ぎか？

そんなことを考えていると、例の魔法少女がそもそも起きてきた。

「ウーン…こは…」

「おっ、やつと起きたか！貴女は森でモンスターに襲われそうになっていた所、ここに居る青髪のアズマに助けられて森で眠つていたからエリス教会へと連れて来たと言う訳だ。体調は大丈夫か？」

「森で青髪の…あつ！」

思い出したそうだな。それにしても本当に助けられて良かつた。

すると魔法少女が近づいてきて

「助けて頂いた事感謝します。アズマ！我が名はめぐみん！アークウイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！」

なるほど確かにクリス様の言つた通り目の赤い紅魔族は、変な名前で中二病らし

いな… 教えて貰つていなかつたら引いていたかも知れない。まあ、そのまま自己紹介しても良いのだが折角なので俺も真似しよう。

「どういたしまして。では、改めて我が名はアズマ！ 未知数の力を秘めており、やがて魔王を討伐する予定の者！」

「き、決まつた！ 上手く言えたか分からないが気持ちが良いものだな。前を見るとめぐみんは、震えていた。

そして、めぐみんは

「素晴らしいですよアズマ！ 特に未知数の力を秘めての部分が紅魔族の琴線にビンビン触れます！」

「おお、そうか」

どうやらお気に召された様だ。しかし

赤い目が光りキスしてしまいそうな距離まで顔を近付けた。男の子だった頃だった頃なら顔を赤くする所だつたが女の子になり性欲が消された今だと

恐ろしいほど冷静になつてしまふ。

クソ、心がそのままで性欲が消されたから、混乱しそうだ天罰恐ろしすぎだろ。

「近い、近いよ！」

「ああ、すいません興奮してました。？ そういえばアズマは紅魔族じや無いのに、どうし

て合わせられるのですか？」

「まあ、故郷でもありましたからねえ、私も興味が合つた時期があるんですよ。」

まあ、少し黒歴史だがな。

「なるほど！やはり紅魔族が受け入れられないのはこの街がおかしいだけなんですね！」

安心しました！」

いや、中二病は普通に世間一般的には受け入れ無いと思うが……

「今のもう一度言つてくれませんか！」

「フフフ、決め台詞は一度で決めて……そこからカツコ良さがあるものなんですよ！」

「お……おお分かつてますね！……決めました！助けて貰つたお礼をどうしたら良いか悩んでいましたが、この上級職アーケウイザードの私がお姉さんの仲間に入つて上げましよう！」

めぐみんが仲間になりたそうな目でこちらを見ている！

「まだギルドにも行つて無いですが、上級職が仲間になつたら心強いですね！宜しくお願ひします！」

めぐみんが仲間になつた！

「あの、そろそろ良いだろうか？」

そんな、めぐみん世界に入つていた俺達？私達は、ダクネスを忘れて話し込んでいた

そうだ。

「ああ、すいませんダクネス、すっかり話し込んでいました！」

「いや、どうやら話が纏まつたようで良かった。めぐみんだったか、初めまして私はダクネス。クルセイダーを職業としているものだ、仲間が帰るまでだがアズマのパーティに入ることになっている。宜しく」

「ご丁寧にありがとうございます。宜しくです！」

彼女達もすぐ仲良くなりそうで良かつた！しかしダクネスは臨時とはいえ、豪華なメンバーになつたな。

俺がチートで選んだ女神はどれほどの力があるのか分からぬが大丈夫だろうか？  
「そういえばアズマ、まだ冒険者登録をしていないんですね？早くギルドへ行つて登録しましょう！」

「分かりました！この街は初めてなので案内を宜しくお願ひします！」

そんな期待と不安に溢れながら教会を飛び出した！

# 憎き力エルと戦闘を！

「ああ！アズマー前に木があります！止まつてください！止まつてください！」

「えつ、ヒヤーー!?」ゴチン☆

「ああ、アズマやつぱり力エルの中は中々に良い中毒性があるな。体が舌に拘束され更にヌルヌルプレイが楽しめる！ああ私はこれからヌルヌルになつた体に…」

「いてて、てつ！どうしてまだ装備を外して力エルに食べられているのですかあ!?力エルは金属を嫌うから装備を付けときなさいと言つたでしよう!?今、助けてますからね！」

「あつ待つてください！アズマ！置いてかないでくだs・！?はう

「めぐみんさん?!ダクネスを助けたら助けますからね！」

「私は、お構い無く」

「やつぱりあなたMなんですか!?変態何ですか!?ゴチャゴチャ言つて無いでサツサツと出てください！力エルは倒しましたから！」

「アズマー助けて下さい!!」

「あーもうどうしたら上級職が3人もいるのに力エルなんかに苦戦するんですーー!?

~~~~~

俺は、あの後外が暗かつたので晩が明けるまで教会に泊まつてからギルドへ向かい、周りからの目線を貰いながら、空いていた受け付けのお姉さんから説明を聞き現在カードに触れている。

ちなみに、登録手数料のお金は必要最低限の持ち物としてエリス様から、武器のタガーのついでに三千エリスを貰つていたので、払う事が出来た今度クリス様に会つたらお礼しよう。

「…　はい、ありがとうございます。おお！　防御力が平均的なのと幸運が最低レベルな事以外は、どれも平均以上のステータスですね！　あとは…　あれ？　何ですかこの尋常じやない魔力は!?　人間離れしすぎです!?」

どうやら俺は、取り敢えずチートとして魔力を貰いそこそこの身体能力を手に入れたらしい。幸運が最低レベルと言うのが引っかかるが戦闘には、あまり関わらないらしいので大丈夫だろう。中々良いチートを貰つたと思う。良かった。

「これほどのステータスなら、ほとんどの職業になれますが魔力が高いので上級職なら魔法使い職の『アーヴィザード』か、プリーストの上級職である『アーヴィプリースト』辺りがオススメですね」

うーむ『アーヴィザード』は捨てがたいが、仲間のめぐみんはすでに『アーヴィ』ザードだから特になる必要が無いな、それに格好が完全に僧侶だし。まあ、俺は魔法

を使えれば良いから『アークプリースト』にしどくか。

「では、アークプリーストでお願いします。」

「アークプリーストですね。あらゆる回復魔法と支援魔法を使いこなし、前衛に出ても問題ない強さを誇る万能職ですね！では、アークプリーストつと。冒険者ギルドへようこそアズマ様。スタッツ一同、今後の活躍を期待しています！」

お姉さんは、にこやかな笑顔でそう告げた。

よし、貰ったチートも少し分かつたし異世界ライフを楽しみながら魔王討伐を目指して頑張ろう！

「お待たせしました！」

「おっ！ 戻ってきた様だな。」

「それで、アズマのステータスはどうだつんですか？」

取り敢えずめぐみん達にカードを渡す。

「なつ、何ですかこの尋常じやない魔力は！ 紅魔族である私よりも多いじやないですか！」

まあ俺の身体能力では無いけどどうやらこの体は、紅魔族よりも魔力が多いらしい。

「職業はアークプリーストですか。アークウイザードだつたから爆裂魔法を教えていたのに…」

「何か言いました？ そういえばまだめぐみんのステータスを知りませんでしたね。見せてください！」

どうぞと言いながらカードを渡されてダクネスと一緒に見た。

「うむ、なるほど確かに爆裂魔法をとつてゐる様だな！ 凄いでは無いか」「やつぱり、爆裂魔法と言うのは凄い物なんですか？」

「そうなんですよ！我が必殺の魔法は山をも崩し、岩をも砕きくく…」  
めぐみんは自分の世界へ行つてしまつた様なので何故か頬を赤らめながらブツブツと何かを言つてているダクネスにカードを見せてもらう。

なるほど確かにクルセイダーらしいな。前衛のダクネス遠距離のめぐみんヒーラーの俺でバランスが取れた。まあダクネスは、パーティに入りたいと言わない限りはクリス様の下へ戻るので前衛を探さないといけないが。

「……つまり私の魔法で世界は変わるのであります！…

「では、取り敢えず簡単そうなクエストから受けてみましよう！」

俺は自分のチートを試す為に簡単なクエストとして受付のお姉さんに紹介された  
ジャイアントトード5体の討伐を引き受けた。

「爆裂魔法は最強魔法。その分、魔法を使うのに準備が調うまで、あのカエルの足止めをお願いします」

平原の、遠く離れた場所には1匹のカエルの姿。そして逆方向には近いカエルが居た。初めて見たがかなり大きいその体躯は牛を超える巨大さだ。どうやら繁殖の時期になると、産卵の為に体力を付けるため、エサの多い人里にまで現れ、農家の飼つているヤギを丸呑みにするらしい。

「分かりました！ めぐみんは遠くのカエルを狙つてください！ ダクネスは近くのカエルを…」

と、そこで気が付いたさつきまでダクネスが居た場所には丁寧に装備だけが置いてあるでは無いか。

「やばいです！ アズマ私の狙つていたカエルにダクネスが食べられました！ 私も制御が…」

「へ？」

いやいや、おかしいだつてジャイアントトードは金属を嫌うのでダクネスの装備だつたら食べられる心配は無いはずだ。… というか待て今めぐみんがとんでも発言を言つてなかつたか！ 制御がなんちゃらと

「待つて！ めぐみんさん撃たないでください!!!」

「ああヤバいです！ヤバいです！体がボンってなります！」

ボンつて何だボンつて！ああ！めぐみんの周囲の空気がビリビリと震えだした。絶対にヤバい！俺は迷わずめぐみんを押した！

「ちょ、アズマ！」

ドッカーン

めぐみんの放った魔法はカエルなんて居ないただの平原に当たりそこには大きなクレーターが出来ていた。あれにダクネスが当たつていたと思うと冷や汗をかく。

「ふう、危なかったですね。めぐみんさんちよとダクネスさんを助けに行きますので、一旦離れてから攻撃準備をしてください」

「出来ません」

「へ？」

「すいません、私の奥義である爆裂魔法は、絶大な威力ですがそれを使うには、限界を超える魔力を使うので身動き一つ取れません。まさかこんな事になるとは……」

そう言つてめぐみんは倒れた。それと同時にカエルが地中から5匹程湧き出してきた。…嘘だろ。

「ど、取り敢えずめぐみんさんを背負つてダクネスさんを助けたら逃げましようか」

俺は背中にめぐみん、右手にタガー、そしてカエル対策でダクネスの置いて行つた装

備を着て助けに行つた。

「ダクネスさん！大丈夫ですか？」

「これは……とても良い！」

なんか、顔を赤らめながらカエルに食べられているナニコいつ怖い！

「い、今助けてますからね」

めぐみんを置いて自分に筋力強化のバフを掛けカエルにタガーを刺した。普通のタガーなので少し時間が掛かつたが何とか倒せた。

「ヒール！どうしてわざわざ装備を脱いてカエルに突っ込んだのですか？カエルは金属に弱いと聞かなかつたのですか？装備に着替えて下さい。一旦逃げますよ」

まあ一応倒せたが時間が掛かるしカエルが多すぎる。それに今はめぐみんを安全な所へ連れて行く方が大切だ。あとめぐみんに一つ聞かないといけない事がある。あとダクネスにも。

「断る。騎士として、市民に危害を加えるかも知れないモンスターを見過ごしには出来ない」

既に超スピードで逃げているとダクネスが何か格好良い事を言いながら頬を赤らめながらUターンしてカエルに飛んでいき全力で大剣を振りかぶり……！

「ああ！アズマ！前に木があります！止まつてください！止まつてください！」

「えっ、ヒヤーー!?」ゴチン☆

後ろを向いて走つてしまつたので木に思いつきり衝突した。

「ああ、アズマやつぱりカエルの中は中々に良い中毒性があるな。体が舌に拘束され更にヌルヌルプレイが楽しめる! ああ私はこれからヌルヌルになつた体に…」

「いてて、てつ! どうしてまだ装備を外してカエルに食べられているのですかあ! ? カエルは金属を嫌うから装備を着けときなさいと言つたでしよう! ? 今、助けてますからね! ? カエルの前には小さなクレーターが出来ていたどうやらあの大きな的を全力で外したらしい。というかどうしてまた装備を外してゐるんだ? ? まさかとは思うが… チツとにかく助けないと。

「あつ待つてください! ? アズマ! ? 置いてかないでくだ s . : ! ? はう」

マズイ木に当たつた衝撃でめぐみんを飛ばしたのを忘れてた! ? めぐみんは頭からパクつとカエルに食べられた。

「めぐみんさん! ? ダクネスを助けたら助けますからね! ?」

「私は、お構い無く」

「やつぱりあなたMなんですか! ? 変態何ですか! ? ゴチャゴチャ言つて無いでサツサツと出てください! ? カエルは倒しましたから! ?」

「アズマー助けて下さい! ?」

「あーもうどうしたら上級職が3人もいるのにカエルなんかに苦戦するんですかーー!?」

カエルを三四匹倒した後さつきの衝撃で起きた残りの三匹が襲ってきたので自分に筋力強化のバフを掛けまくりタガードでカエル六匹討ち取りましたが最後の一匹は分泌物を勢い良く出したのでアズマさんもヌルヌルです。

「：：反省会はお風呂でしましようか」